MARUTANE
Quality Seeds

「たんくろう®」「スーパーたんくろう®」枝豆の栽培要点

トンネル栽培のポイント

生育初期の保温による発芽と生育の促進、及び生育後期の高温障害の回避が重要です。

①発芽の良い苗づくり

- 播種土には通気性の良い土を使います。（枝豆は発芽に多くの酸素が必要）
- 育苗箱やセルトレイに播種します。覆土、潅水した後、乾燥防止のため新聞紙で被覆します。発芽までは潅水を控えて、発芽後に軸が伸びすぎるのを防ぎます。
- 発芽適温は 20 ～ 25℃ですが、少し高めの温度（25 ～ 28℃）で一斉に発芽させるのがそろった苗をつくるコツです。逆に温度が低いと発芽まで時間がかかり腐りやすくなります。
- 発芽が始まれば、すぐに温度を 22℃程度に下げるとともに、育苗床の換気を行い、しっかりした苗をつくります。
- 定植までに徐々に温度を下げて、定植時の環境に慣らしていきます。

②施肥・耕起・うね立て

- あらかじめ堆肥を使った土づくりをしっかり行っておくことで保水性や通気性が良くなって、栽培しやすくなり、秀品の生産につながります。
- 元肥は成分量で 10a あたり、窒素 6 kg、リン酸 15 kg、カリ 12 kg、苦土石灰 100 kgを基準に、前作に応じて加減します。
- 土壌水分が少ないと活着不良の原因となるので、土壌水分が適切なときに、うねをつくりマルチとトンネル張りをします。（定植数日前からマルチ、トンネルをしておくことで地温を上げて活着を促します）

③活着のよい定植

- 定植はできるだけ無風で暖かい日を選んで行います。
- 定植は初生葉（双葉の次に開く葉）が展開し始めた頃が最も活着しやすいです。生育が進んだ老化苗では活着が不良になりやすいので定植おくれのないようにします。
- 定植後はトンネルを閉めきって、温度と湿度をやや高めに保ち、活着を促します。

定植適期苗

④定植後の管理

- 枝豆は幼苗期に節数の決定と花芽の分化がおこなわれるので、この時期は特に乾燥や過湿、気温管理に注意します。
- 天気のよい時はトンネル内の温度が上がりすぎるので、30℃以上にならないように換気を行います。
- 開花期間中の温度は日中 25 ～ 30℃、夜間 15 ～ 20℃を目標に管理します。10℃以下の低温や 35℃以上の高温では花粉の稔性がなく、落花・落莢が増えます。特に開花初期は開花数が多く、結莢率も高い重要な時期なので注意します。
- 開花期間中の乾燥は着莢不良となるので土壌水分を適切に保ちます。また、開花期間は空中の湿度も重要なのでトンネルの除去は開花期以降が理想です。

⑤収穫適期

- たんくろうは子実が充実し、へそが桃色に少し色づいた頃がもっとも、糖分やうま味成分であるアミノ酸が多く含まれています。
- 収穫適期は 3 日程度と短いので、収穫遅れがないようにします。

露地栽培のポイント

暑い時期での栽培となるので水分管理と病虫害の防除が重要となります。

①育苗～定植

- 基本的にトンネル栽培に準じますが、元肥はトンネル栽培より、窒素を成分量で 10a あたり 1 ～ 2 kg少なめにします。

②過湿の防止

- 過湿で通気性が悪くなると、根の働きが悪くなり定植後の活着不良や生育不良をまねくので、排水路を作るなどの対策をおこないます。
- 水田転換畑や水田に接している畑では地下水位が高いので、高うねで栽培します。
- マルチ無しでの栽培では中耕することで湿害回避の効果が大きいです。ただし生育中期以降の中耕は表層の根を傷め、生育を抑制する場合があるので、開花の 10 日前までにおこないます。

③乾燥の防止

- 分枝数や節数を順調に増やす為に、乾燥しすぎる場合は潅水をしますが、過度の潅水は徒長や過繁茂をまねき、倒伏の危険があるので気をつけます。
- 開花期の乾燥は落花が増え、収量の減少につながるので、うね間に潅水するなどして乾燥を防ぎます。

④病害虫の防除

- 梅雨明け以降の高温条件で発生しやすいので、初期防除に努めます。特に開花期以降のカメムシの発生は莢に直接、加害しますので初期防除が大切です。

丸種株式会社　元気な種、すくすくと。
〒600-8691　京都市下京区七条通り新町西入ル
TEL 075-371-5101（代）　FAX 075-371-5108
www.marutane.com